

4年2組

廃棄を無くそうプロジェクト ～わたしの手で新たな価値を～



この椅子が売れたということは…

廃棄物に新たな利用価値を見出し、生まれ変わらせる活動の中で、12月、廃棄物を用いた商品の販売を行いました。しかし、商品に廃棄物を用いていることや、商品の質が低いと感じたことから「本当に売ってよいのか」「この商品を売るということがお客様のためになっているのか」と考えていたAさん。販売をしてみると、たくさんのお客さんが4年2組の商品を手にしていました。想像以上に売れていく光景を見て、喜ぶ子どもたちの姿がありました。そのような中、Aさんは「君たち、とても良い活動をしているね。じゃあ、これを買っていくね。」と語るお客さんの声から、わたしたちの活動の意味を考えていきました。販売活動を次のように振り返りました。

(前略) 木の椅子は釘が出ていて、座るととても痛かったです。しかし、びんずる市で売ったらすごく売れて行列ができるほどでした。売れたということは僕たちの活動を認めてくれたんだと思う。

Aさんは、4年2組の商品を買ったお客さんは、日常の買い物とは異なっていたと感じたのだと思います。買い物をする時は、商品の必要感や、質、値段など様々な要素で総合的に判断します。一方で、4年2組の商品を買ったお客さんは、「廃棄物に新たな利用価値を見いだせないか」「捨てられてしまうものでも、工夫することで『ごみ』ではなくなるのではないか」という活動に良さを感じてくれたのではないかと。Aさんは、お客さんの姿からそのようなことを感じていったのだと思います。他の子どもたちも、自分たちが一生懸命向き合ってきた「廃油」や「牛乳パック」が生まれ変わった商品の売れていく様子に、「すごいことをしているんだ」「本当に廃棄で喜んでもらえた」などつぶやきながら、活動の意味を感じていきました。



このお金は、絶対に私的に使っちゃいけない。

販売活動で得たお金で「誰の笑顔につなげるのか」「どのような使い途を選択すべきか」ということを何回も話し合いました。「支援団体に寄付することで、わたしたちの活動が命を救ったことになる」と考えていく子どもたちと、「学校のために何かしたい。友だちが笑顔になる。そういうことを自分の目で確かめたい」と考える子どもたちの主張が対立しました。繰り返される話し合いの中でBさんは、憤りを隠しきれませんでした。涙を流しながら仲間に、「何で、当たり前の生活ができている自分たちの笑顔を優先するのか分からない。材料費だって学級費に戻したんだよ。だから、このお金は本当に、正真正銘自分たちの努力で生み出したお金なんだよ。寄付したら、自分たちの努力で、世界のどこかの誰かの命を助けることができるんだよ」と語りました。しかし、友だちの「活動の目標にしていた笑顔が見られない。





学校のために使ったら、目の前で笑顔になる友達を見られる。僕は、そういう達成感が大切だと思う」などの声を聴きながら、「みんな頑張ったもんね。一人ひとりの思いが尊重されるべきだね」と続けました。Bさんだけでなく全員で思いをぶつけあいながら繰り返される話し合いの中で、印象的であった言葉が「このお金は、絶対に私的に使っちゃいけない」と語ったCさんの発言です。みんな納得していました。この言葉の背景とみんなが納得したということを考えてくなりました。稼いだお金で自分たちでお楽しみ会をやってもよかったです。しかし、子どもたちにとっては、このお金は「自分たちの活動」から生まれたお金であって、「自分たち」へのお金ではなかったのだらうと思います。だから、自分たちのために使う気にはなれないし、真剣に話し合っただけで使い途を決めていきたいと願っていたのだと思います。さらに、考えていきたいです。

やっぱりすごいことをしていたんだと思います。

活動してきたことやこの活動で学んだことを「信州ESD・SDGs成果発表会」で発表しました。そこで、4年2組の取り組みを知ってくださった方々から、たくさんの感想が寄せられました。

「捨てられるものを利用価値のあるものへ、アップサイクルの取組ですね。ものを作って売ってみようと思ったところが素敵です。モノを作って、買ってもらえるということは、その分だけ新しい価値を加えること（付加価値）ができて、それが認められたということです。稼いだお金を自分たちのために使うのは違う!と思ったことは素晴らしいですね。たくさんの笑顔が見られたのではないのでしょうか。稼いだお金は、次の廃材を使った新しいモノの開発に使うことも考えてみて欲しいなと思います。もしかしたらもっと素敵な新しい価値をつけられるかもしれません。続けて頑張ってください。そして、この活動を3年生や2年生に教えてあげて、長野小学校で続けられるクラブ活動のようになるといいなと思います。そしたら皆さんが中学生、高校生、大学生になったとき、そのときの小学校四年生が皆さんの活動を続けていることを見ることができるかもしれません。」

「長野小学校4年2組のみなさん素敵な発表をどうもありがとうございます。様々な建設会社さんや農園はもちろんのこと、最も身近な学校の給食室から出る廃油など、普段生活していると「当たり前」のように「ごみ」として扱われるものに、みなさんの努力とアイデアにより価値が吹き込まれていくって素敵なことだなあと感じました。捨てられればごみ、使われれば資源なのだと改めて感じました。また、お金についても学校においてはつい目を背けがちになってしまうのですが、学習を深めていくうえで重要なものとして目を背けずに、クラスのみみなで考えている姿がすごいと感じました。お金の価値とその裏にある努力、時間や労働力のコスト、どこで作ったか、何を使ったか、だれが作ったかなどの付加価値等の関係を考えることは、実社会とかかわる生きた学びになると思います。」

いただいた感想を読んだ子どもたちは、とてもうれしそうでした。冒頭で紹介したAさんは、「これだけの人が認めてくれているんだということを感じた。やっぱりすごいことをしていたんだなと思った。あんまり自分たちの活動に自信

がもてなかったけど、とっても自信になった。」と語りました。

子どもたちが「自信をもてた」と言える活動を共に歩むことができ、とてもうれしいです。見えない「誰か」をずっと見てきました。しかし、その渦中に、たくさんの「自分たちの笑顔」がありました。この活動は、自分たちのためでもあったと感じていることを願っています。

